

なつかしさ、まぶしさ

屋良健一郎

一〇一二年、一〇一三年と若手の歌集刊行が相次いでいる。最近も堂園昌彦『やがて秋茄子へと到る』(港の人)が出た。一九八三年生まれの作者の、十九歳から二十九歳までの歌を収める。

・春の明るい怒りを前に畠中の震えるビールの切れ端

・ほほえんだあなたのなかでたくさんの少女が二段ベッドに眠る
土からビニールの一部が出ていてのを見かけることがある。

首目、そのような何気ない、しかし気になる光景を描いた観察力。冬の間、ほつたらかしにされている畠だらうか。ビニールを震わせる風の音も聞こえてきそうな歌だ。二首目は比喩が印象的。少女が「たくさん」いて、しかも「二段ベッド」という幼さが強調される語が用いられていることで、「あなた」の微笑みのあどけ

なさが上手く伝わってくる。

- ・噴水は涸れているのに冬晴れのそこだけ濡れている小銭たち
- ・百万枚のクリアファイルに満たされた冬の泉へ僕は近づく
- ・泣いている春の子供を見かけたらその子の和紙をちぎってやつて

・春になつたら君の心に紺青の悲しみを統べる石浮かぶだろう
この歌集には「春」「夏」「秋」「冬」を詠み込んだ歌が多い。特に「春」「冬」という語を含む歌は、それぞれ二十首以上ある。歌数が百九十五首だから、かなりの割合だらう。十二ヶ月、あるいは

は季語で表現するのではなく(もちろん、そういう歌もあるが)、春夏秋冬という四区分でストレートに詠む(このような若手歌人の季節を示す語彙の傾向を調べてみると面白いそうだ)。大雑把な季節の捉え方に、やや物足りないという印象も持つたが、一方で、読み手に作者の世界観を提示するには、それが分かりやすく、効果的なかもしれない。掲出歌、「冬」は静謐さを生み、「春」は感情が表出する季節として描かれる。読者は、作者が構築したそのような季節感を享受し、「春」「夏」「秋」「冬」という大枠みな語が次々と出ることで、めまぐるしい時間の流れを体感する。

・君もあなたもみな草を見て秋を見て胸に運動場を宿した

「秋」「運動場」という語が運動会を連想させ、それだけでノスタルジックだが、そのなつかしさは、次々と季節を変える歌の流れの中に置かれることで、より強まっているのではないか。

最後に、この歌集で特に魅力的だつたタイプの歌を挙げる。

- ・とても陳腐な喜びを聞く時に君はまぶしい道を見ている
- ・居酒屋に若者たちは美しく喋るうつむく煙草に触れる
- ・夜がまだきみの瞳に貼りついている間に話す僕の過失を

・球速の遅さを笑い合うだけのキヤツチボールが日暮れを開く
止まらない君の嗚咽を受けとめるため玄関に靴は溢れた
一首目、「陳腐な喜び」を語る人、「まぶしい道」を見ている「君」、その「君」を見ている作者。三首目、夜通し語り合つて生まれた信頼感が、夜明け間近に作者の心を開き、「過失」を打ち明けさせた。五首目、落ち込む「君」(一人暮らしだろう)を慰めるために、狭い部屋に詰めかける友人たち。語り合う若者たち、交錯する人間関係、青春の時間、そういった描写に実感がこもつてゐる。